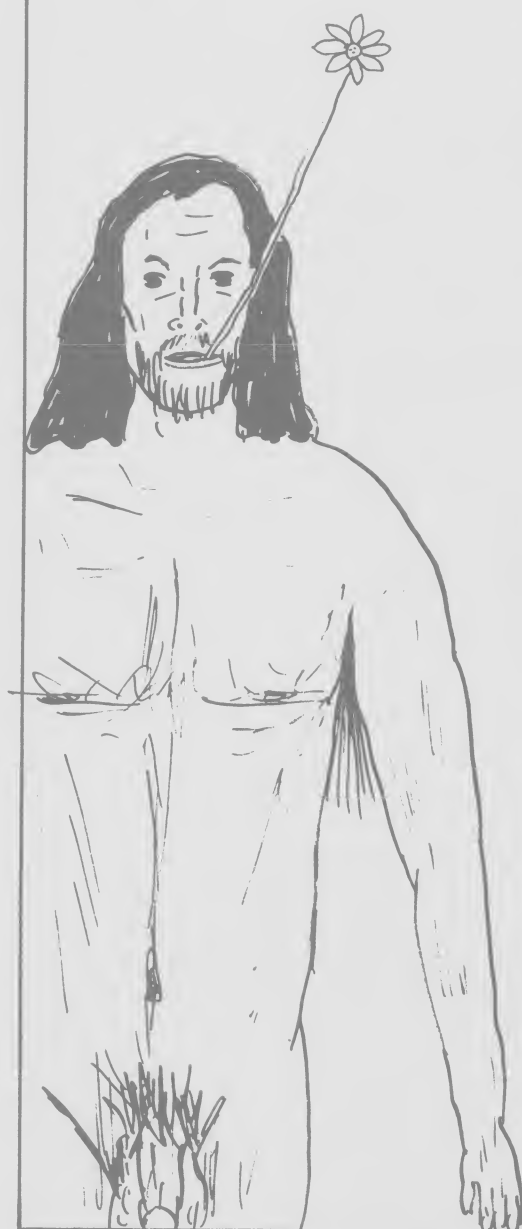
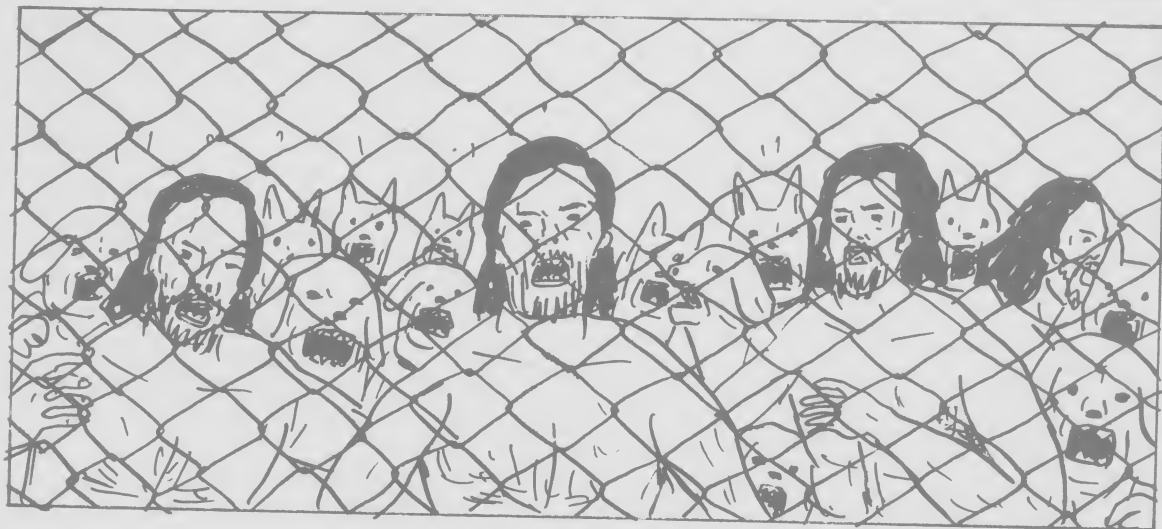
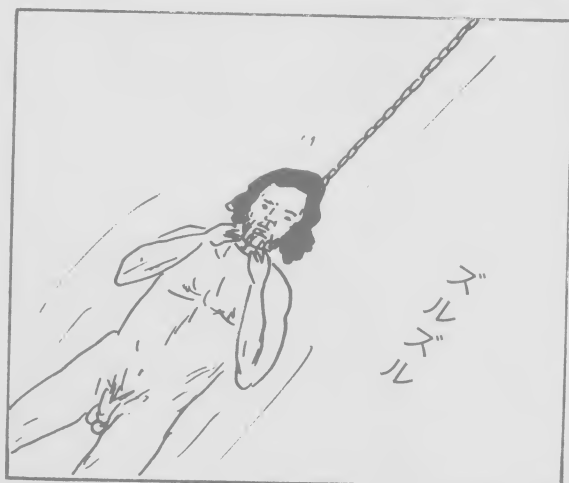
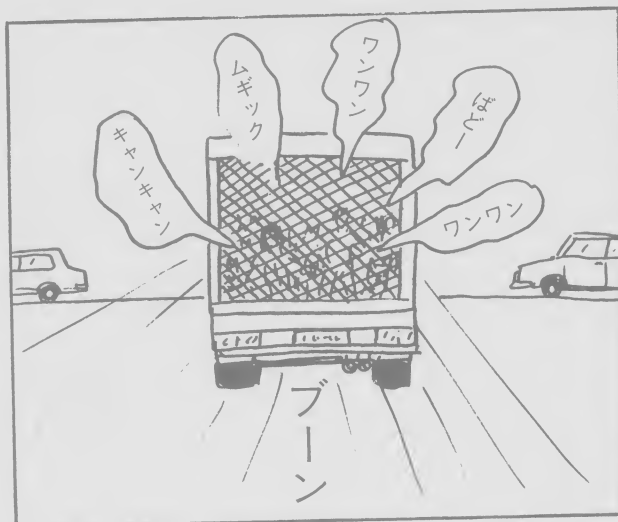


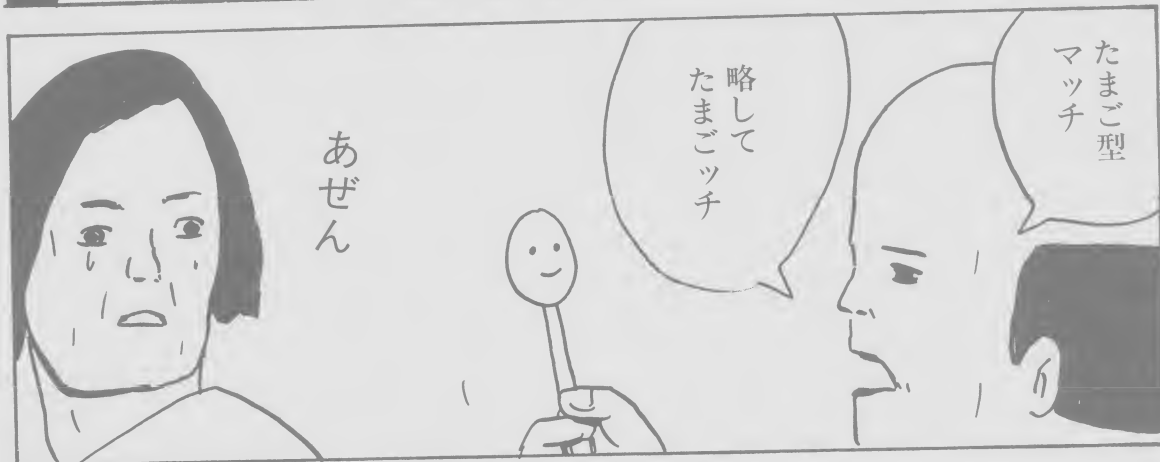
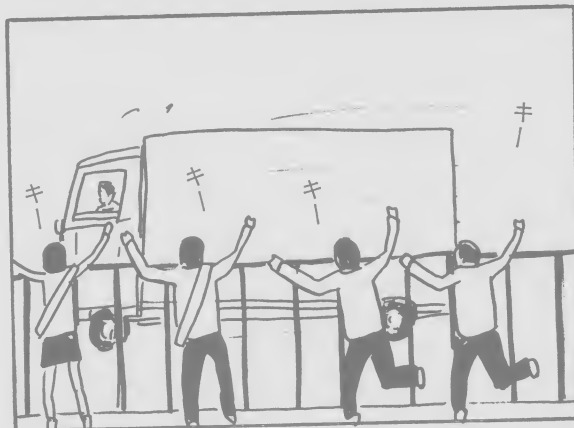
# 人<sup>じん</sup>情<sup>じょう</sup>人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>ハカイダー

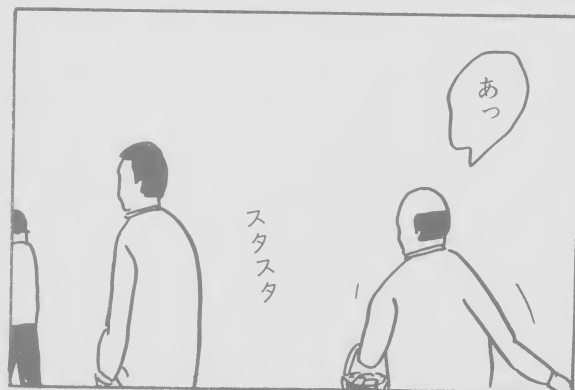
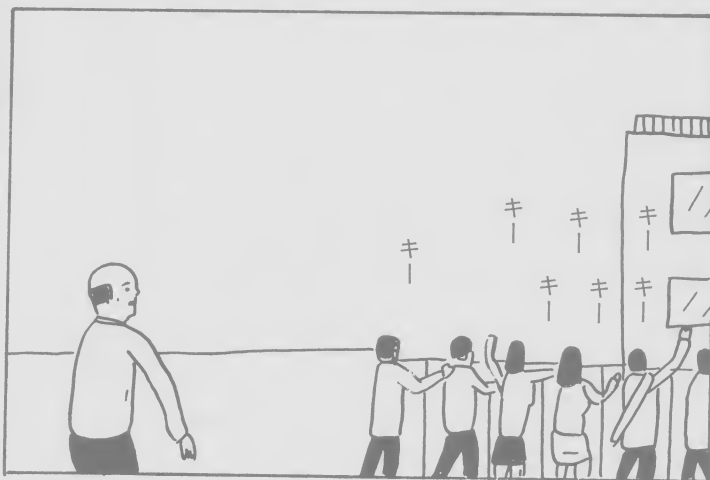
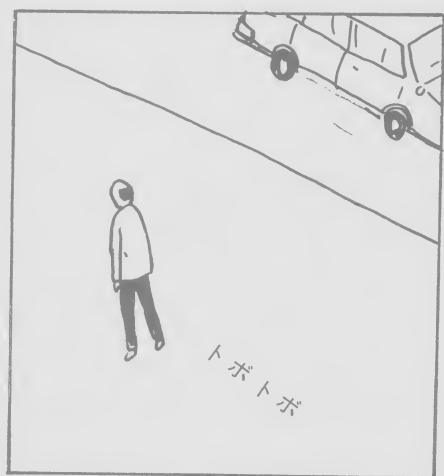
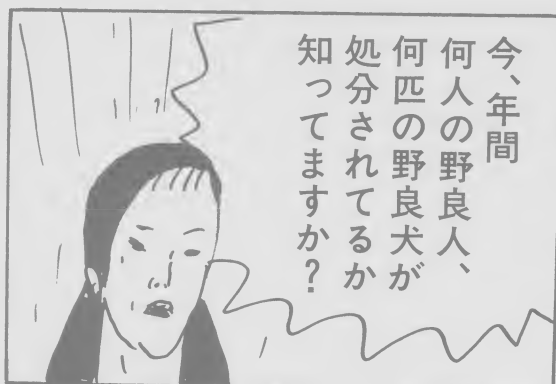


花 く ま ゆ う さ く

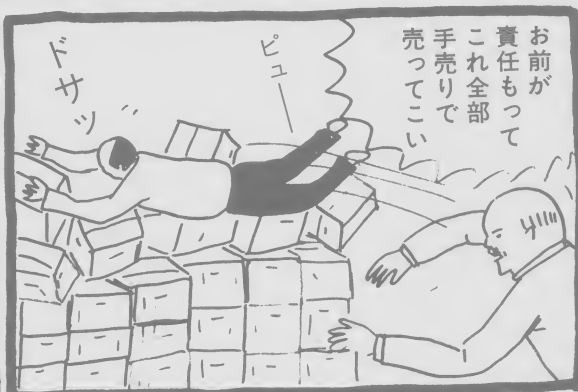




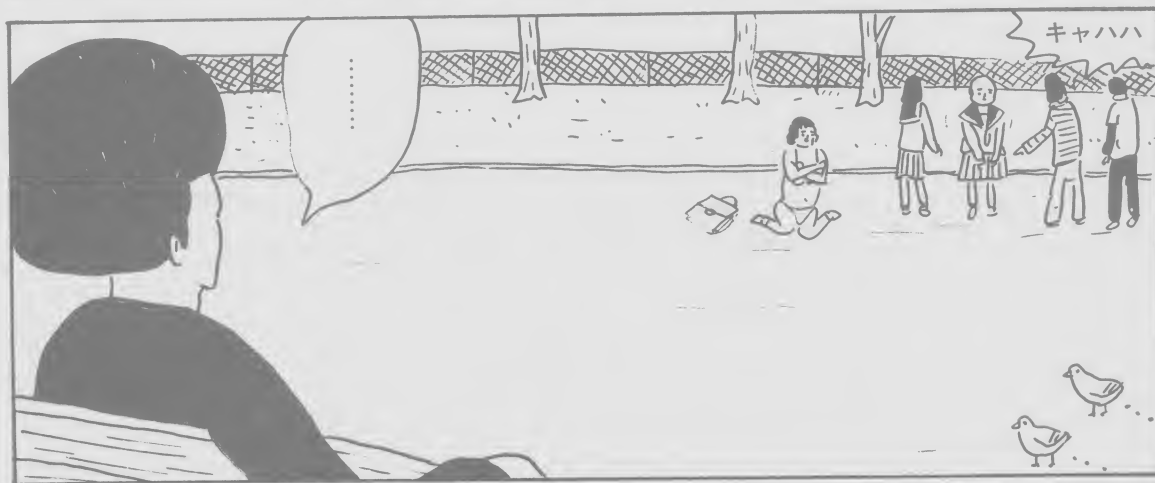




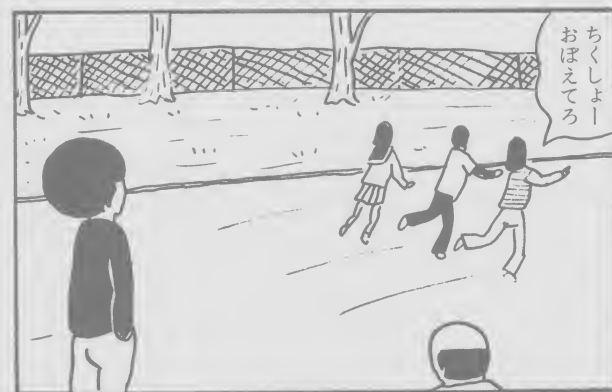
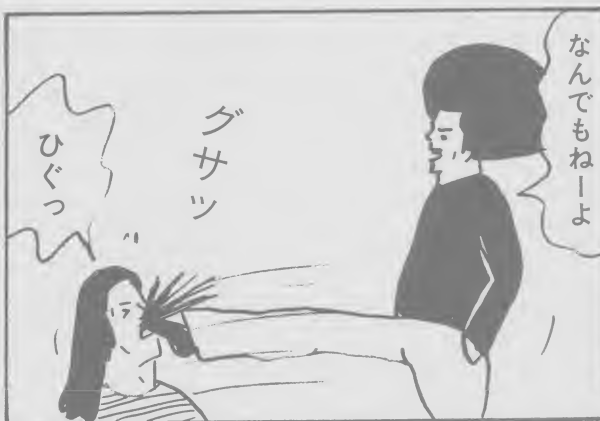


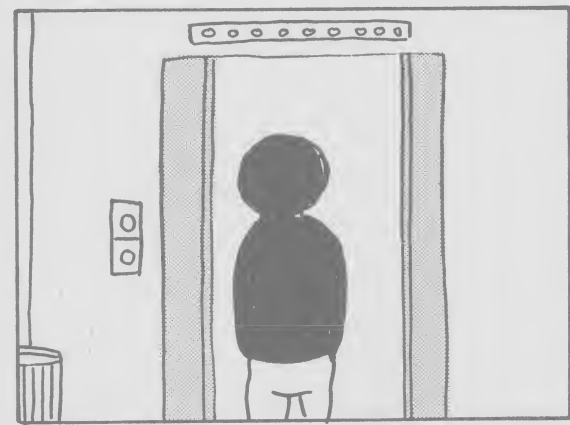
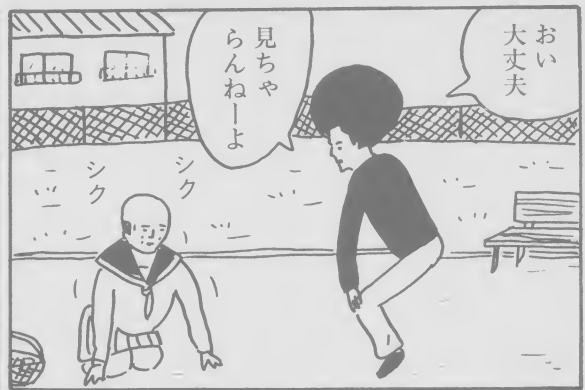






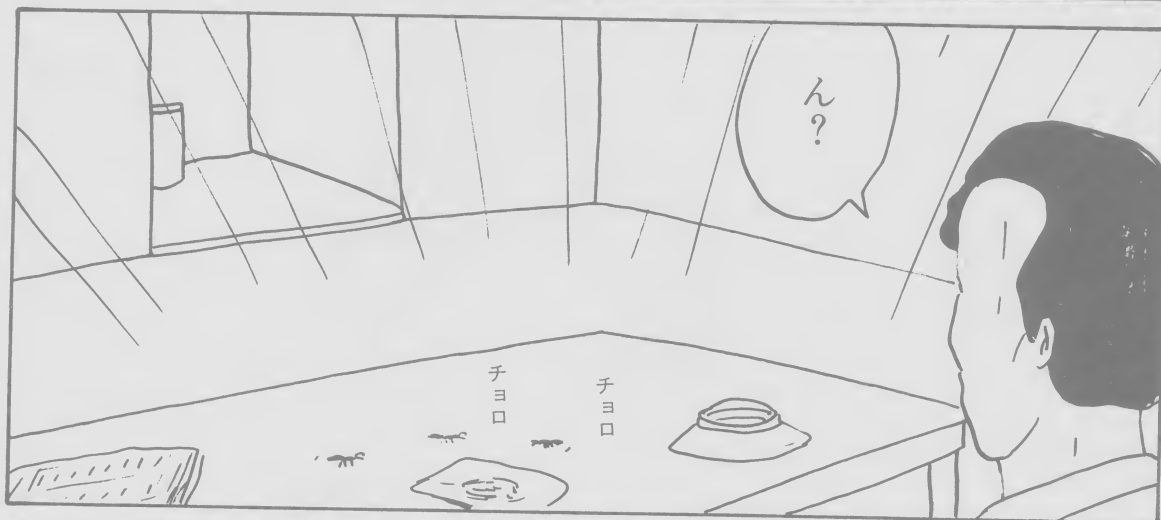








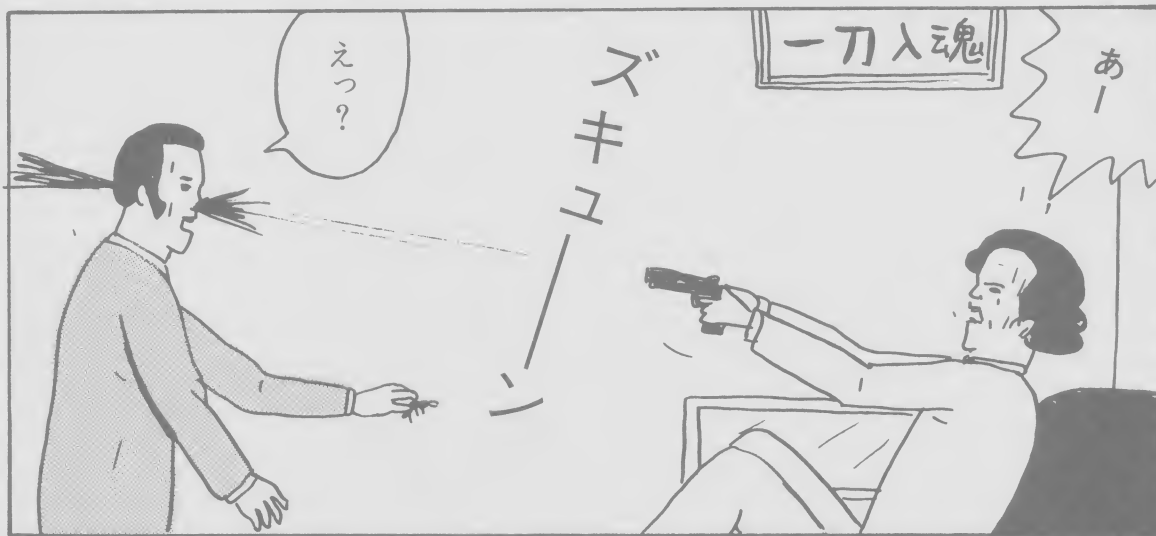
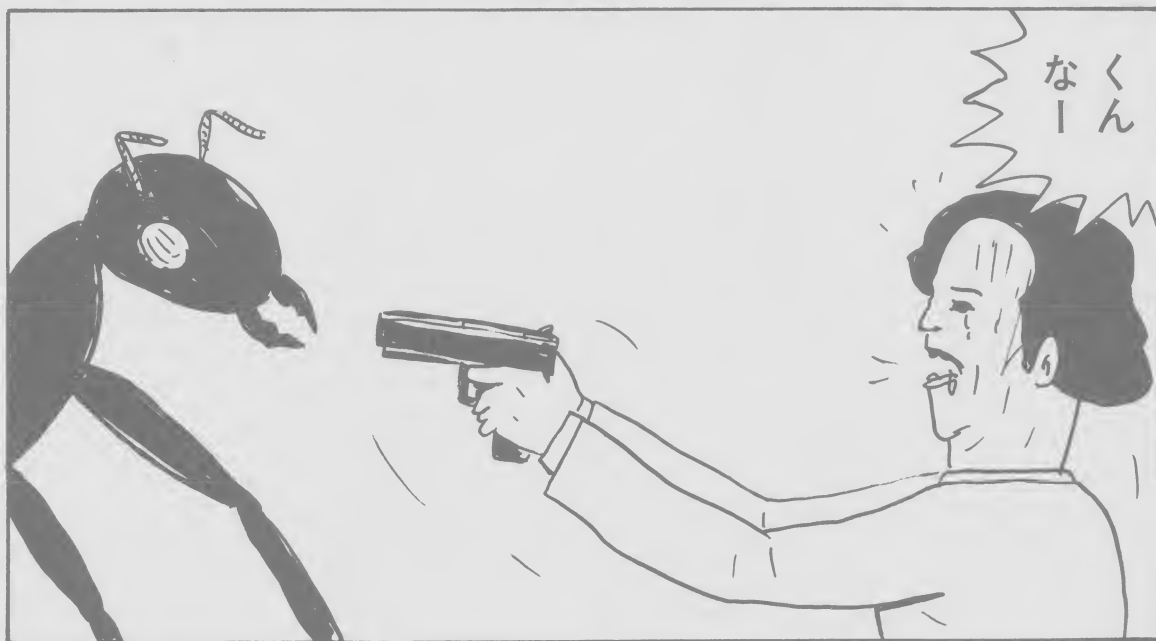




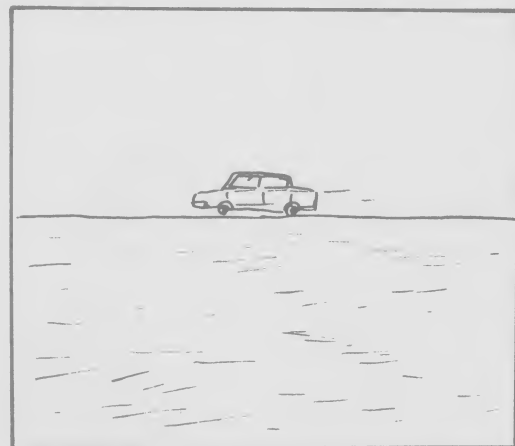


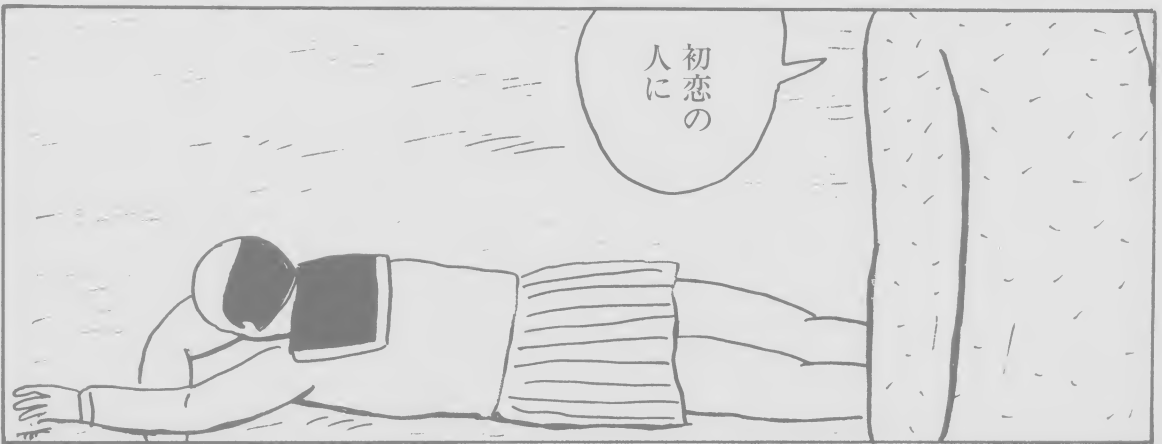
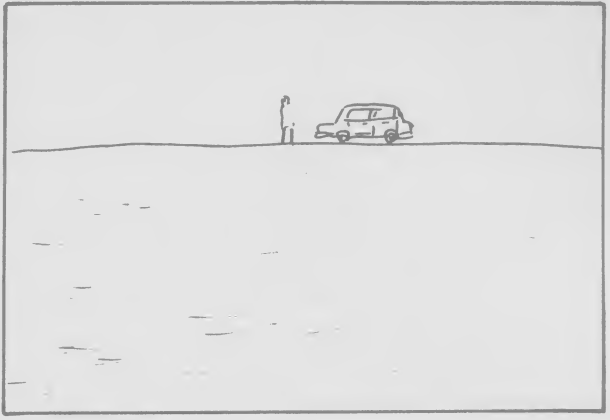


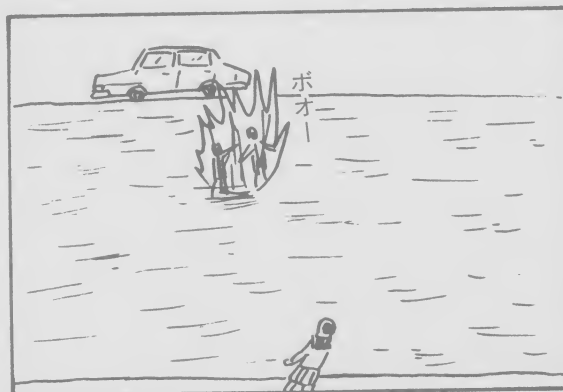
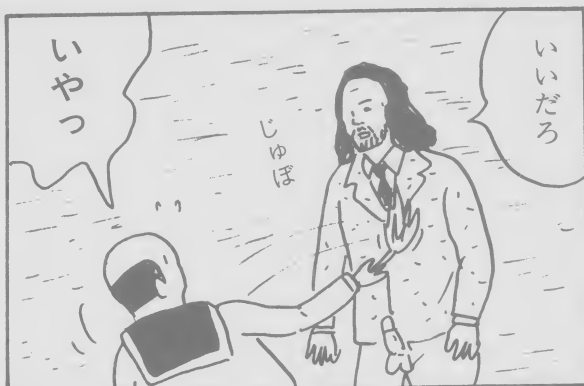
はく製

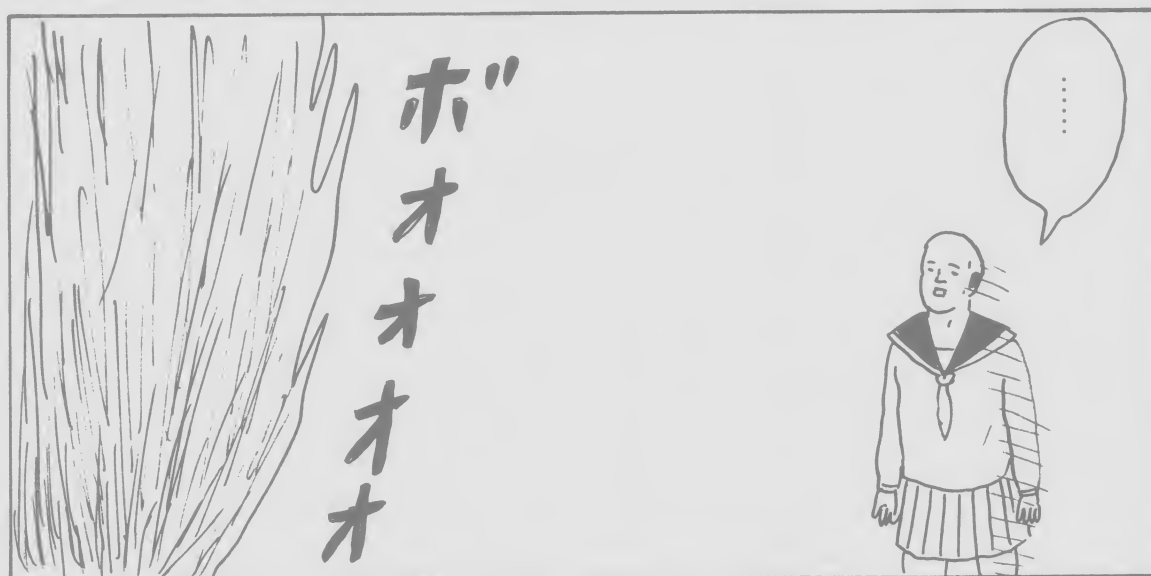
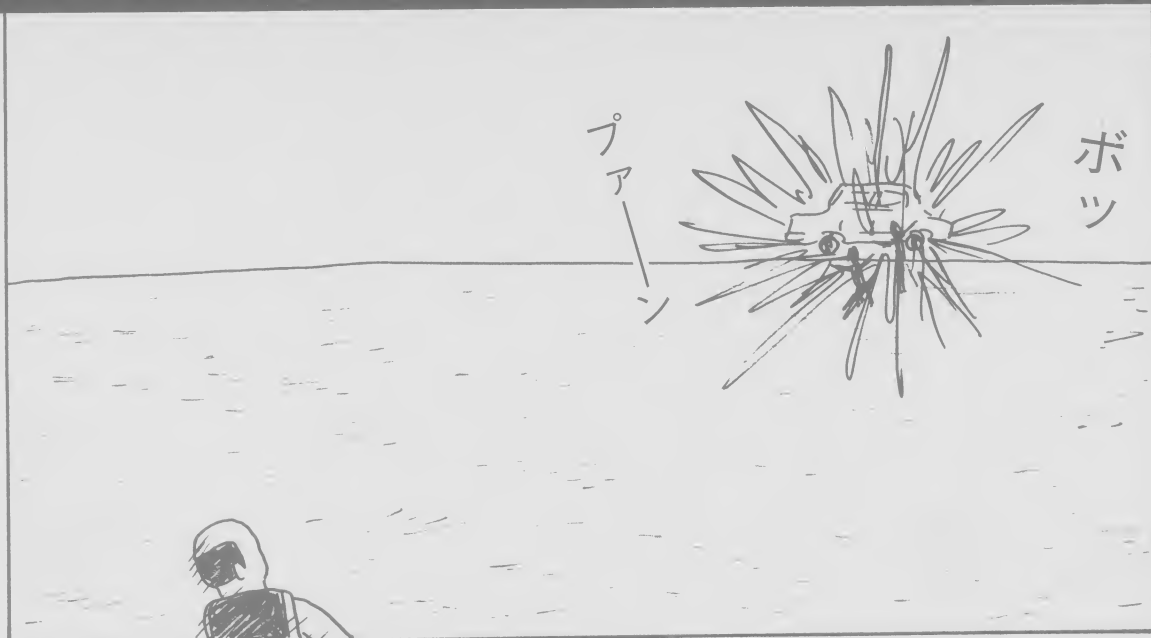


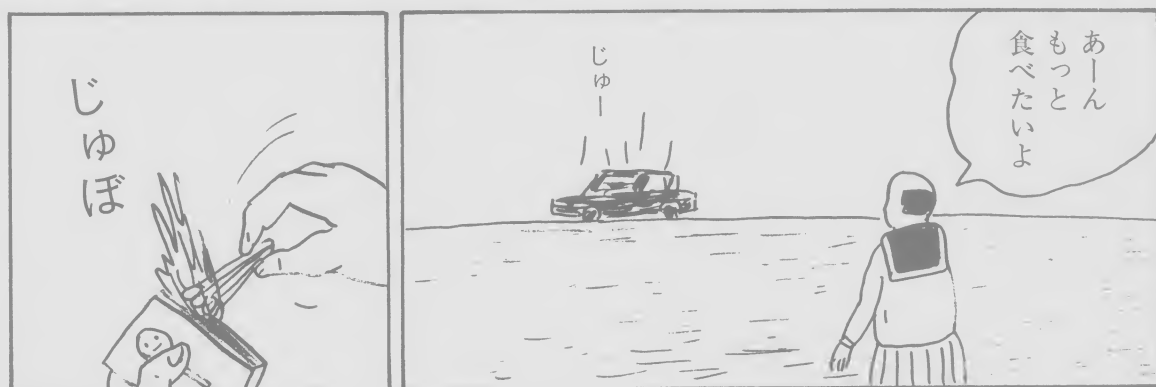
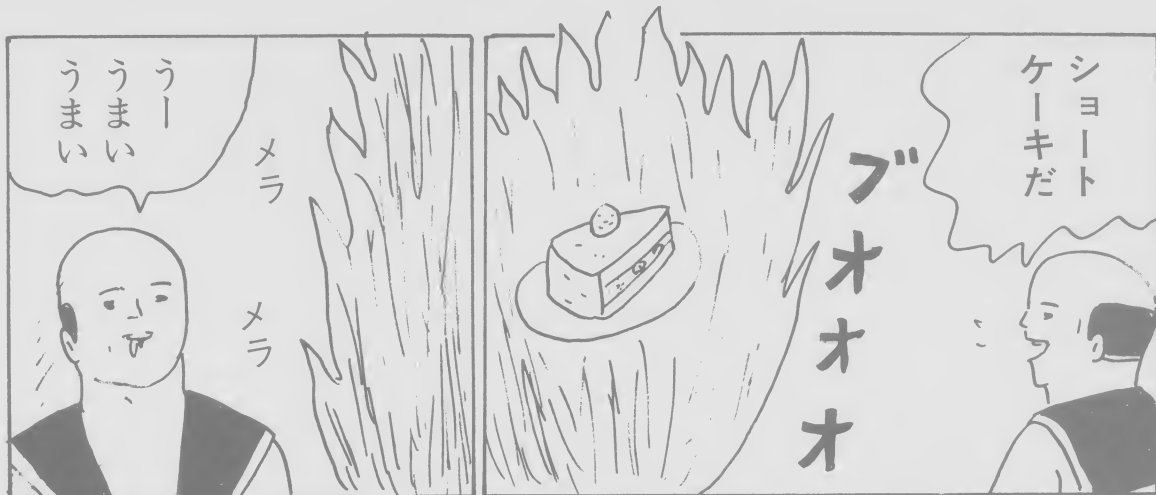


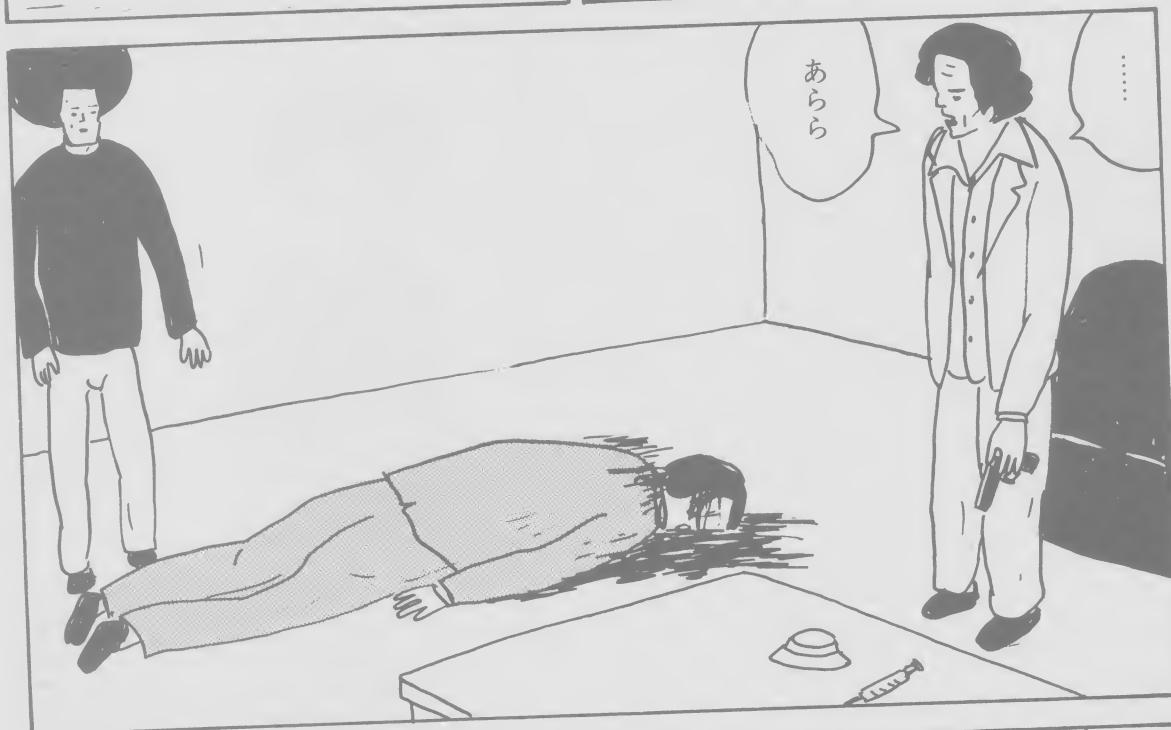


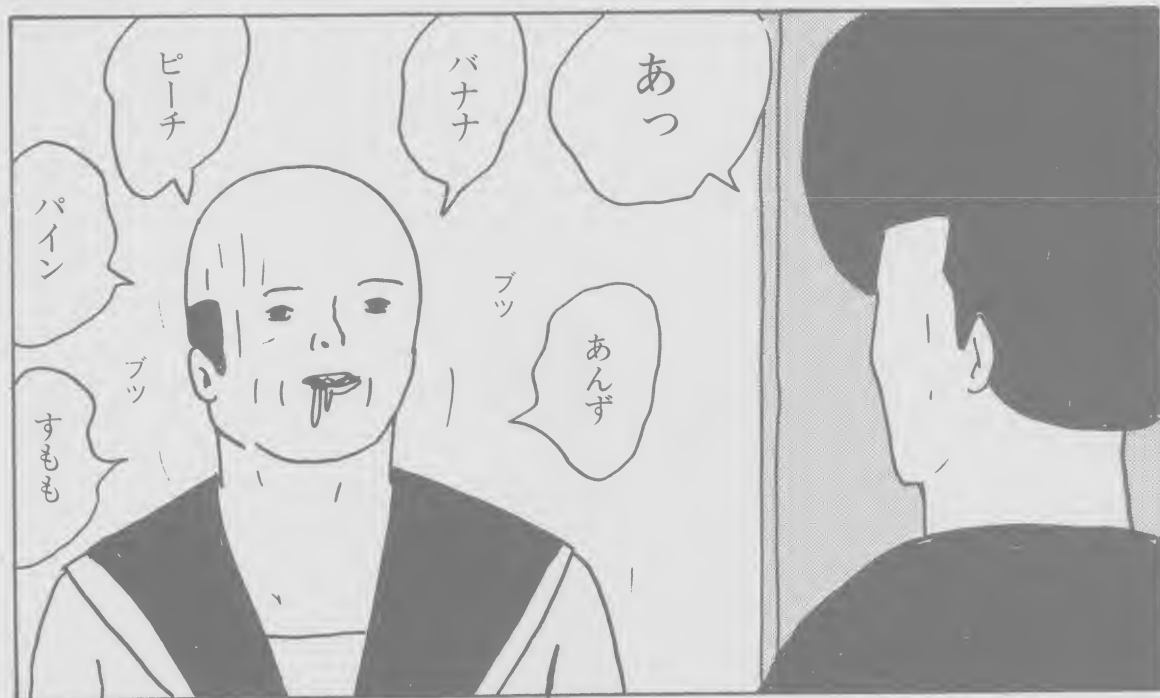
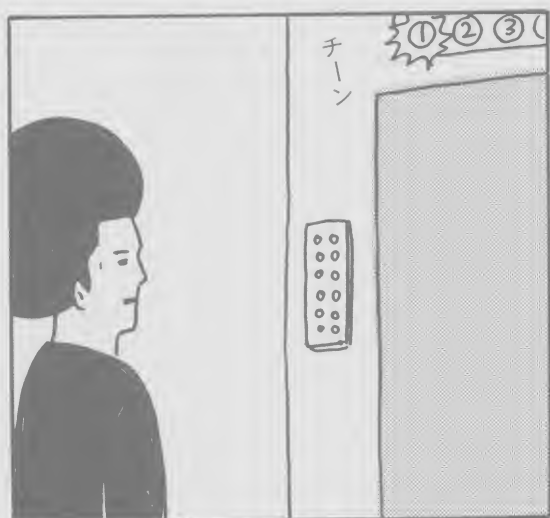
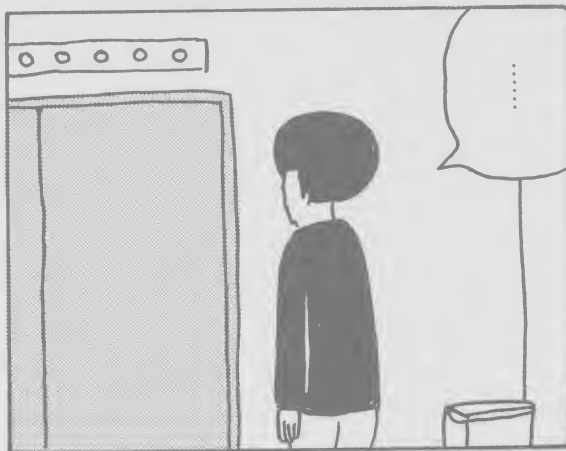




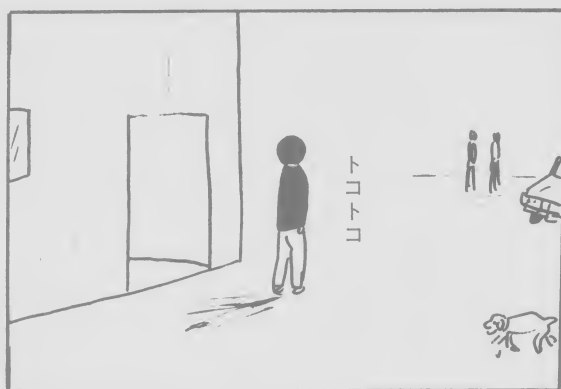


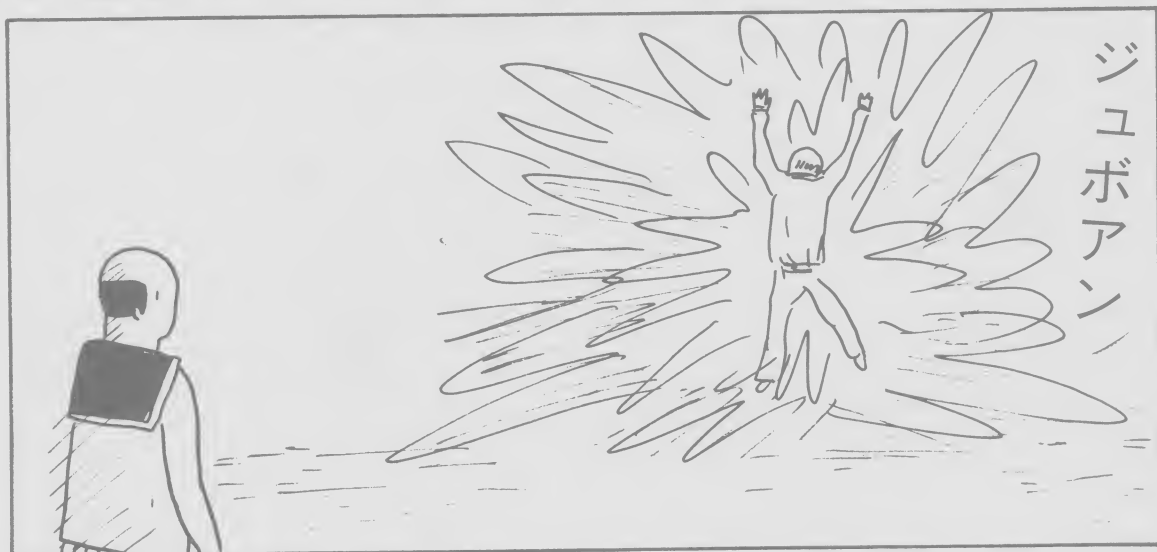
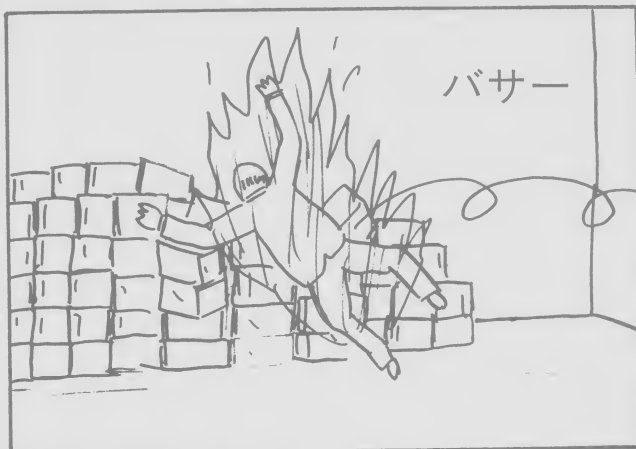


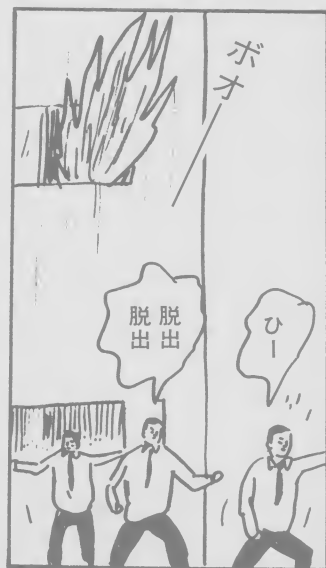


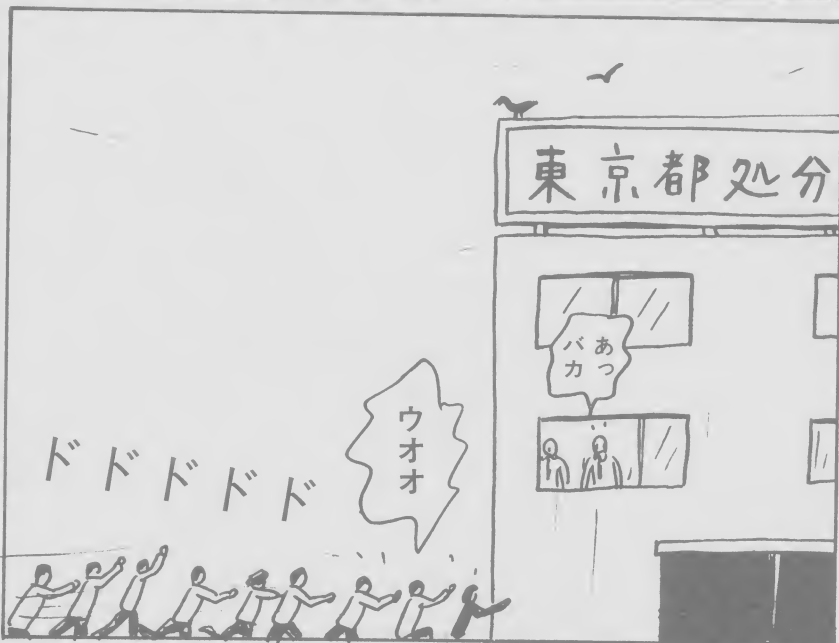
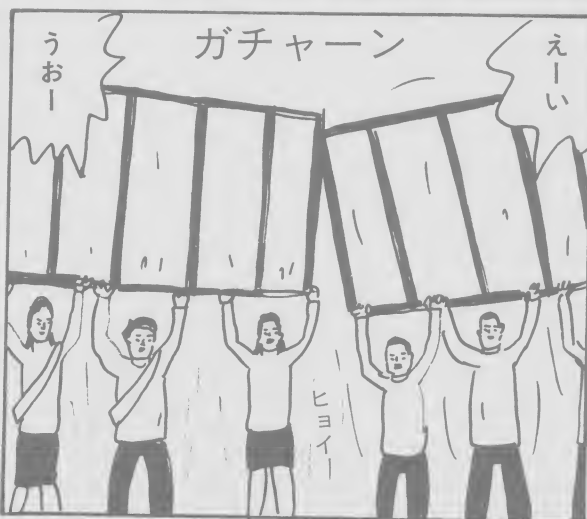


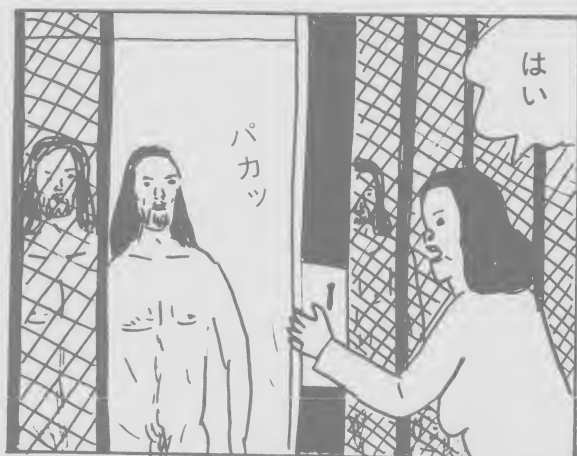


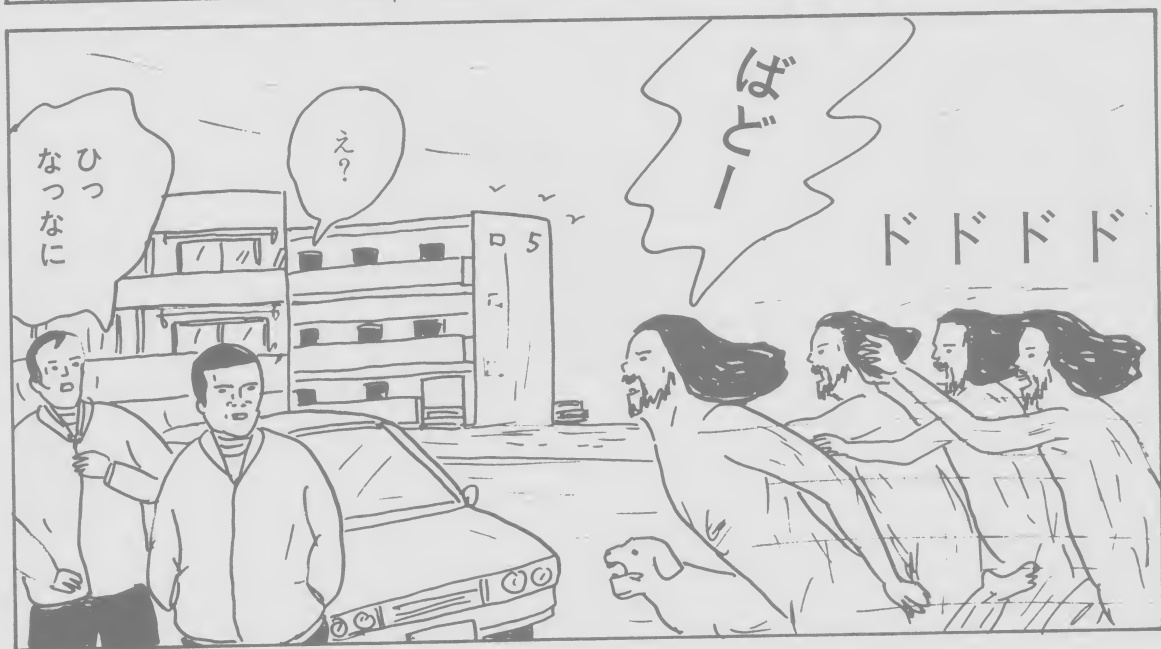
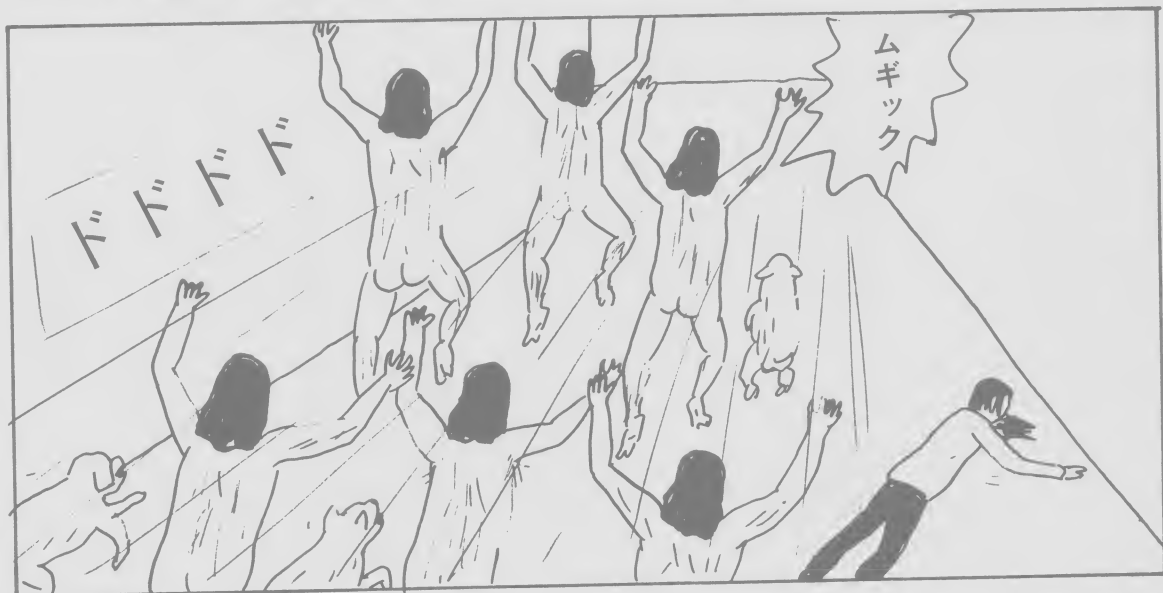


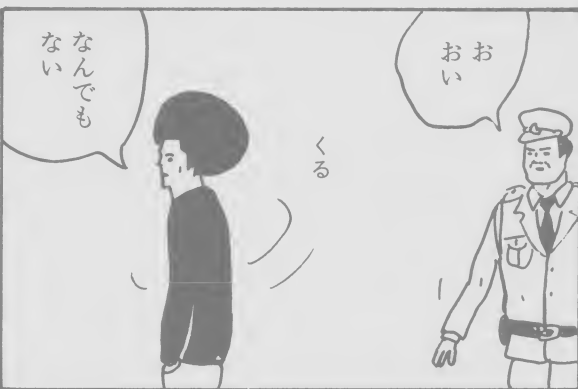
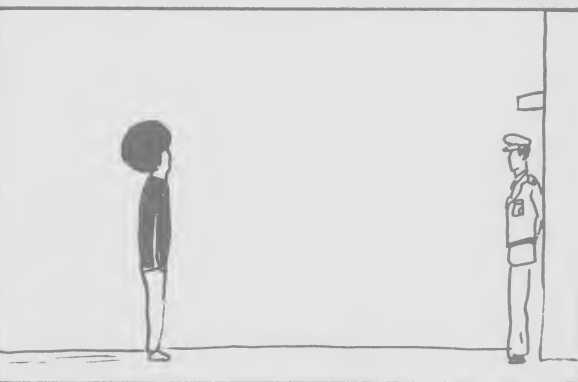
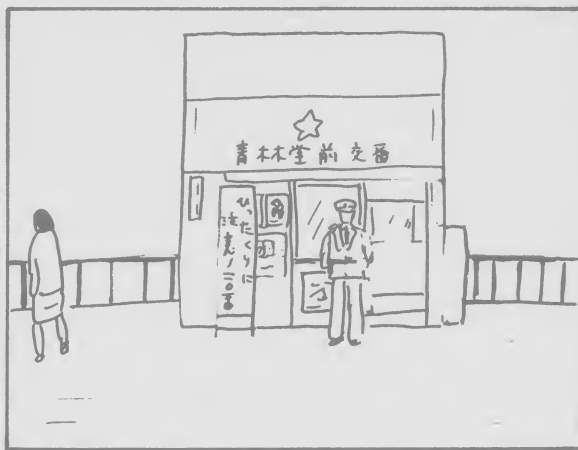






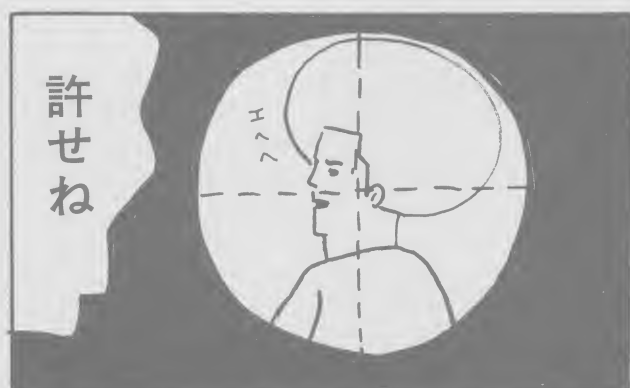


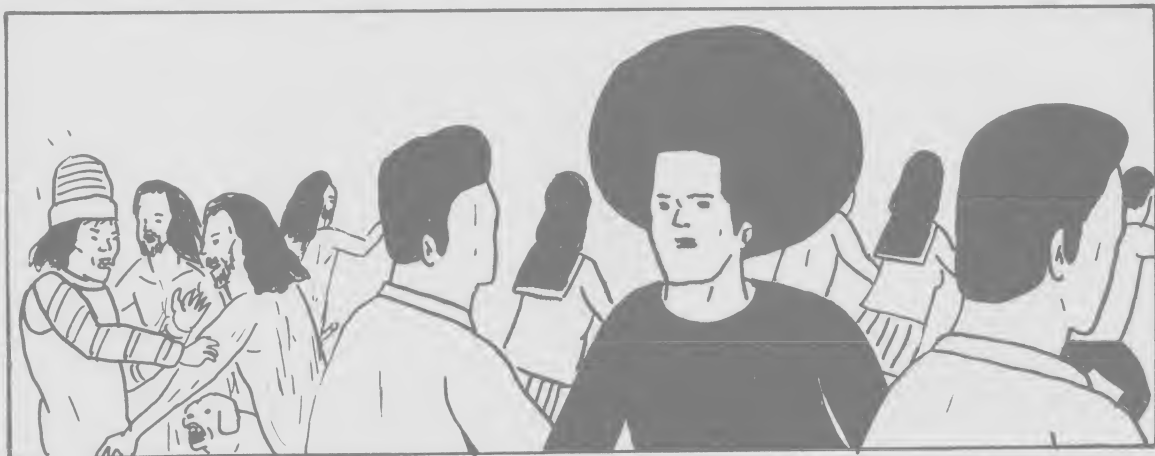












# 特集 トラッシュ・コミック

マンガのミッシング・リンク!?



お宝ブームだ何だと騒がれる昨今、マンガ界でも大御所の作品にウン十万、あるいは百万単位の値段が平気でつけられるようになった。さらに最近ではその動きにカルト、モンドブームも加わり、過去の埋もれた名作から珍作・奇作の類まで、今まで一部でしか評価されていなかった、もしくは全く忘れ去られていた作品がかつてなかった視点で再評価される動きもある。徳南晴一郎の『人間時計』（太田出版）が版を重ね、竹内寛行の『墓場鬼太郎』が古書店で高値を呼んでいる。一昔前ならまずマニアには見向きもされなかった70年代の少女怪奇モノ新書判までが引っ張りだこである。今回の特集では再び蘇った「ゾンビ・コミック」、あるいはまだ眠っている（この先甦るかも知れない!?）「私だけのこだわりの名作」を取り上げてみた。今、単行本で読めない作品だからといって見るべきところがないわけではない。読まなくなったからってマンガを捨てたりすると、何十年後かにリベンジするかも知れないぞ！